

四 裁縫と洗濯

(一) 裁縫

1 生地を整え方

沖永良部では裁縫という言葉はなく、縫うものの名をさしてチバラノーユン(着物を縫う)、ハウイノーユン(羽織を縫う)といった。縫い物の上手な人は、機織りの上手な人とともに「あの人はチュウホウだ」といわれた。

明治のころは、地機で織りおろした布は、二人の女の人が両方で布を持つて、耳のついたのや、たるんだのを調べ、きれいに巻いて整える。チンタ(砧)のある家ではチンタの棒に布を巻き、両手に持った棒で前にぐるぐる回しながら整えた。ちょうど、しんし張りアイロンをかけたようなものである。この後布を裁ち、着物を縫った。

2 着物の名称と裁縫用具

身ごろを「ドウツテ」、おくみを「フンニ」、襟を「クビ」、かけ襟を「クビサシ」、肩当てを「ハタウシ」、居

敷当てを「マイウシグ」という。

フンニはほとんど「かぎおくみ」であった。「棒おくみ」のことを「マルタフンニ」といった。かぎおくみは布地がおくみの長さの一・五倍で二つのおくみができて少しでも布が節約になるからである。

裁ち方の上手な人には「豆腐キユンガネタシユン(まるでやはらかい豆腐を切るようにやすやすと裁断している)」とほめた。縫うときには物差しもなく、前に縫ってある寸法に合わせて縫うので、待ち針、指ぬきもいらず長針だけで縫いあげた。自給自足時代には自家用はすべて自分たちの手縫いだった。

裁縫は小学校三年生からあり、母親はわが子に期待をかけた。青年学校ができてから、生徒は着物類の縫い方が上手になり、家庭でも重宝がられた。そのころから専門的に縫う人がいた。それをシタティヤ(仕立て屋)といっていた。時代の変遷とともに裁縫用具もいろいろ調えられた。

3 洋裁

和泊に洋服屋が開店したのは大正の中期である。終戦後アメリカ兵の軍服HBTが配給された。厚くて固い濃

緑の木綿布地のミシン縫いを解いて、子供用、大人用を手縫いで、ズボンも上衣もうわっぱりも作った。その当時ミシン機を持っている人は町内に数人しかいなかった。

終戦を契機として、作業衣、職場衣、学童服すべてが洋装になった。それ以来大変な進歩をとげ、既製服、あつらえ服と各自の体形や好みに合った洋服を着用するようになった。

(二) 洗濯

沖永良部では、洗濯することを、古くはチバラアロユン(着物を洗う)、シンタク(洗濯)といった。灰汁を汚れた箇所につけて、溜池、川、泉、暗川などで洗った。

洗う方法にはもみ洗い、ふり洗い、つまみ洗い、おしつけ洗い、足ぶみ洗いなどがある。作業着や冬のツクリヤリゴ(つくろったぼろ衣)などは、石でたたいて手でもんで洗った。白い布は、灰汁がないと白くならないので、そのころの手ぬぐいは黒ずんでいた。灰汁のほかに、グサンコ(はいびすかす)の葉をもんで、ねばりのある液を作り、それで着物の襟あかななどを落とした。

大正になってから、アレサホン(洗い石けん)といつて

固形石けんが入り、大変便利になった。その後、洗濯板が入り、たらいの中で洗濯ができるようになった。分離中は石けんがなく、昔に戻ったような洗濯だったが復帰後、本土からいろいろ進歩的な用具、洗剤が入った。

○ 芭蕉布白生地ばしょうふの漂白法

芭蕉布は洗濯の巧拙がその品質に大変影響するもので、その洗濯は相当の技術がいるものである。

① 畑のシイミ(かたばみ)を臼でつき、その汁を水で薄めた液、またはシークリブ(島みかんで酸味が強い)のしぼり汁に二、三時間ひたしておく。

② その後水洗いして陰干しにする。

また、米ぬか、米のとき汁で煮てから芋を皮のままつぶして作った液につけ、弱火で一時間煮て、さめてから水洗いして陰干しにする。化学薬品で漂白すると芭蕉独特の黄味色の光沢を失う。

五 保存法

(一) ヒチとたんす

昔は保存する衣類も少なく、保存する器具も少なかった。普通の家庭にあったものはヒチ(木製の箱)であった。富豪の家には、タンシ(たんす)またはヤフギヌヒチ(長持ち)といつて、縦幅七六センチ、長さ一八〇センチ、深さ七十六センチの厚い板で作られ外も内も塗られていた。ふたと側面の中央に、直径三十センチぐらいで幅四センチの円形に金ばくが塗られ、その中に四センチぐらいの金ばくの三本線が引かれていた。このヒチは沖縄からきたもので、金持ちの家にしかなく、その家の娘が嫁入りするときには、このヒチを持たせてやった。そのほかに、七分板で作られ、それにだいたい色の少し渋味を帯びた塗料でぬられた沖縄製のものがあつたが、これをアービチ(赤びつ)といつた。それより手のこまない土地の大工が作ったもので簡単に着色したアービチもあつた。

たんすも沖縄産のもので、現代のような手のこんだものでなく、一般ものの大と小があつた。嫁入り道具としても一部の人が持つて行かなかつた。そのほかに、カバンという簡易な入れものもあつた。明治の終わりのころから土地の人がたんす作りの技術を習つて作るようになり、その数もふえてきた。

(二) 衣類の香料・防虫剤

たんすやひつに保管されている衣類の間に、布の小袋に入れられた乾燥した褐色の物があつた。それをハバシムヌまたはチョージ、クワコといい、上品な香りがしたものである。この香料は、着物に芳香を添えるのと、防虫を兼ねた自然の香料であつた。

(三) 手入れ、管理、扱い方

昔は衣服、繊維の種類が少なく、その手入れ、管理、取り扱いが簡単であつた。大正、昭和と研究が進み、繊維や衣類の種類、特に便利な洋服類が多くなったので、それに対応する手入れ、管理法が考案された。

(四) 嫁入り調度品

明治時代の花嫁調度品は、寝具として木枕にニブイムシユ（寝るときに敷くむしろ、沖永良部産の藺草いんぐさで作った目のあらいむしろ）それに着物数枚を包んだふろしき包み一つであった。

大正から昭和の戦前、戦後へと目を追って華美になり、和ダンス・洋ダンス・作りつけダンス・四点セットふとん類が、夏冬のおそろいで一對とか、昔の人には想像もつかない華美なものになった。

六 禁忌

先祖から伝承されてきたもので、その念願とするところは、災厄から身を守ること、特に病や死から遠ざかるうとするものであった。

- (一) 着物に継ぎを当てる時、あて布に横布を使つてはいけない。―難産するから
- (二) 背縫いのはころびた着物を着てはいけない。―その

はころびから、マーブイヌトウビン（魂が抜けてしまふ）または悪霊が入ってくるから。

- (三) ヒチャイウチョシ シンナ（左前に着物をあわせるな）―それは死人の着方であるから。

(四) お墓や死人の出た家に行くときは、新しいものをつけてはいけない。―新しいものがけがれるから。

- (五) 着物を着用したままで、はころびを縫ったり、ボタンをつけたりするな。―難産するから。

(六) 一枚の着物を縫うのに、二人以上の人で縫うな。―死人の着物を縫うときは、二人以上で縫うから。

- (七) 着物を縫うとき、片袖そでだけつけておくな。どうしても両方つけられないときは、仮り縫いでもしておけ。

(八) 着物をかぶって寝るな。―昔は死人にその人の着物をかぶせていたので。

- (九) げたや草履をかまどの火にくべるな。―神聖なかまどの神に無礼になるから。

(十) 夜、髪を結わないで、洗い髪にして外出するな。―マジムン（悪霊）が髪にひっかかるから。

- (十一) 海うみの漁に行くとき、洗い髪している人と行き会ったら、海に行かないで帰れ。―不漁になるから。

(十二) 夜はつめを切るな。

(十三) 新しい着物を着るときには、必ず水を飲み。水を飲むときに唱える文句がある。「カラダワ チューサ

チバラワ ユワサナリ」（この着物をつける私は、ますます健康で、この新しい着物よりも丈夫であるように）

(十四) 着物を裁つとき、襟えりあきをあげるとき、自分の干支ととの日と巳みの日は避けよ。

(十五) 着物を裁つときは必ず清めの塩を供えよ。そのときに唱えることは「カラダワ チューサ ヌヌワ ユワサ」は、（身は強く、布は弱くあれ）との祈願である。

* 「沖永良部島の衣生活」について

沖永良部島の「衣生活」について、沖力子氏（旧和泊尋常高等小学校訓導）は「和泊町婦人会のあゆみ」に次のように寄稿している。

一、衣食住は人間生活の基盤をなすもので、特に衣生活は、寒冷の土地においては、衣生活及び住生活に事足りても、衣生活に欠乏を来す時は、凍死の恐れさえあ

ると聞きます。幸いにして、私どもの沖永良部島は亜熱帯地方に位置しているため、この島に生活して居る私たちは、衣生活においてその恩恵に浴することが多く、衣生活の安全地帯を独占して居るような感じさえいたします。その理由―炎暑の夏中ばしような着物一枚で過せる土地を本土のどこに求めることができましようか。

二、沖永良部島では消滅して、耳遠くなって居るが他の奄美の島々には「バシヤ山」と言う語が残って居る。それは「ばしよう山」と言うことであるが、普通「あの娘はバシヤ山だ」と言うように使われている。それは見目麗しからぬ娘、すなわち容姿のすぐれない娘を指して言う言葉である。このような娘を嫁がせることは、今も昔も親にとつては苦勞の種で、当時自給自足の出来る衣服原料として、最も大事なものであった「バシヤ山」を持参させて、嫁入りさせたものであろう。その事から転じて、不器量な娘のことを「バシヤ山」と称よえるようになったものと思われるが、それは又同時に「バシヤ山」の持つ意義の大事さを物語るものではあるまいか。

三、ばししよう着物について

(一) 特徴

夏衣の高級品では昔から、上布(ジヨウフ)・麻・明石(絹)と相場がきまつて居ます。上布は植物性繊維で、勿論肌ざわりは冷たいけれども、高価で庶民には手の出せない品物であります。明石は見た目は透かして冷気を誘いますけれども、動物性繊維のために肌ざわりが温かで、湿気を吸収しますと収縮する欠点をもつて居ます。その上高価で高根の花に過ぎません。それ等に比べて私^{わたし}たち奄美のばししよう布は、植物繊維の冷たさを持ち、湿気を吸収せず、はね返しますので、汗にぬれても着ながらにして乾きます。庶民ならびに労働者の生活に最適のものと思われれます。しかも材料は手近にあつて、自己の労力だけで求めることが出来ます。

(二) ばししよう糸の精製法

- 1 幹を切り倒し、一枚一枚皮をはがしとる。
- 2 はぎとった皮は上皮・中皮・中々皮の三種に区分する。糸の質に上・中・下の差がある所以^{ゆえん}である。
- 3 一番外側の粗悪な外皮をはがし捨ててから中の皮



7. バシャクダですいてバシャ糸をつくる



3. 切り倒したばししょうの皮をはぎとる



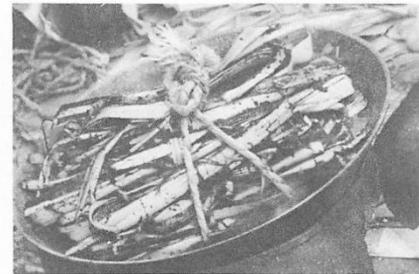
8. バシャ糸を巻いてチグルをつくる



4. ワラを焼いて灰汁をつくる



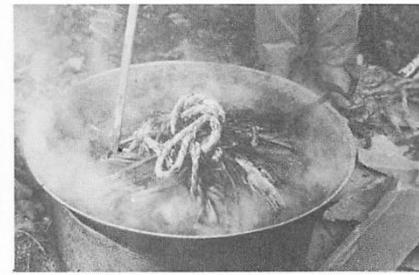
9. バシャ糸をつなぐ



5. ばししょうの表皮を束ねて大きななべに入れる



10. バシャ糸をつないでヨウンゼに入れる



6. ばししょう束を灰汁に浸して煮る

を一皮ずつはがしとつて、一束ずつたばねる。

4 わら灰を溶かした水に、束ごと充分浸してから、大なべの中に、上皮を最下に、次に中皮、最上に中々皮の順に積み重ねる。

5 ばししょうの皮を浸したわら灰汁を、全部大なべに注ぎ入れ、ばししょうの皮全部をひたひたと浸して煮る。親指のつめが簡単に立つくらい軟らかくなるまで煮る。

6 じゅうぶん煮沸されたばししょうの皮を、きれいに水で洗う。

7 クダをつくる。クダはヤンバルデーかミチヤデー(集落内に自生している普通の竹)の生竹でつくる。まず生竹を節をつないで六寸くらいの長さに切りとる。それを縦に二つ割りにして二本とも片端をうすくける。内側を向きあわせて二枚重ね、糸でじょうぶに結わえて、日本ばさみのように自由に使えるようにする。

8 クダを右手に持ち、クダのはさみの間にはししょうの皮のうち、その半分を入れ、はさみを強くしめてから、ばししょうの皮の残り半分を左手に巻いて強く



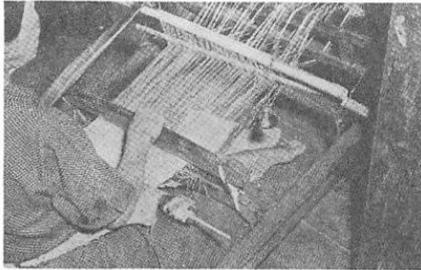
11. 糸車(ハタ)でパシャ糸をハシクダに巻く



12. パシャ糸を巻いたハシクダ



13. 柄合わせ (アヤヒユイ)



14. 地機でばししょう布を織る

引つ張り、雑物を取り除いて繊維だけにする。同様にして残り半分も繊維だけにする。

9 出来た繊維は、その品質によって上・中・下の三等級に区分けし、竿に下げて乾燥させる。

10 乾燥した糸はチグルにして保管する。チグルはばししょう糸を輪型に巻いたもので、直径四センチメートルくらい、竹輪かまぼこに似て中はからっぽになって居た。

(三) ばししょう糸のつむぎ方

1 チグルを水につけて軟らかくしてから、指先で裂いて織糸の太さくらいの糸をつくる。その糸を丹念につないでうめかご(ヲウンゼ)にたぐり入れる。

2 つないだ糸はうめかご(ヲウンゼ)から裏返して入れ替え、水を吹きかけて湿してから糸車でよりをかける。(裏返さないと逆毛が立つので)

3 揚げわくにあげて、かせを作る。

4 木灰汁の澄液を薄めたもので煮て、糸を柔らかにするとともに、つむぎ目を丈夫にしませる。木灰汁はガジマルの青枝を蒸し焼きしたものが最上等である。他にホーギ(蚊やり木・はまごう)や浜かずら

(軍配ひるがお) そてつ葉等を焼いて作ることもある。

5 白生地又はあい染めにして布となす。

(四) ばししょう布白生地の漂白法

かたばみ(シーミ)をうすに入れてついた汁か又はシークリブ(沖永良部みかんの原種)の青みかんの時のしぼり汁に長時間つけてから、清水で漬け汁の香りが無くなるまで洗う。化学薬品の漂白液は、生地をいためる上に、ばししょう布独特の黄味色をすっかり無くしてしまいます。

(五) ばししょう布の島外搬出

大正時代に入りますと、本土商人がこのばししょう布に目をつけて、買入れに来るようになりました。本土向けのばししょう布は、縦糸はガスにして模様は茶色を使用、横糸は白地ばししょう糸にして居ましたが、ガスを洗濯すると縮むので、それが欠点になって居ました。次は生絹をあい染にしたものを縦糸にし、模様は白の生糸を使用、横糸はあい染のばししょう糸を使ったので、縮まなくなり値段も高くなりました。生地が透き通りとても涼しくて良い着物でしたが、汗が出る

と、あい汗と共に下着の白じゅばんを汚すという欠陥を生じたので、次は縦・横とも生糸のあい染の柄物に、色止め用の薬品染料を、あい染の上のせるようになりましたが、この反物はなか／＼手間がかかり、値段が大変高かったため、長続きしなかつたようです。

四 木綿布について

(一) 棉の栽培

この島にも棉の栽培は可能でしたけれども、あまり成績が良好でなく、ある一部の人たちが栽培しただけで、一般には普及しなかつたらしい。昭和十七年頃まで、和泊町立青年学校で試験栽培し、同じ頃各集落の希望者も栽培して居たが、だん／＼戦争が激しくなり、その成績も確かめ得ず、立ち消えとなつてしまった。

(二) チンチミーヌ(紡ぢ木綿)

1 はじめてこの島に綿が輸入されたのは、いつの頃か不明であるけれども、紡ぢ木綿の作業は明治の初期まで継続されて居た。鹿児島から移入された綿は「すいまき」と言い、綿を紡錘状に巻いたもので、正月が近づくと島の婦人たちは、毎晩のようにユイタバ

で夜業、糸車を持ち寄つて、右手で糸車を静かに回しつづ、左手ですいまきから細い糸にして引出す。この作業は相当高度の技術を必要とした。

2 糸車でよりをかける。

3 揚げわくにあげてかせを作る。

4 そのかせを蒸して、糸を強める。

五 絹布について

(一) 昔の絹布は本土から真綿を買い入れて、ニギ板(七〇八寸平方の板に、木釘を縦横とも五分間隔くらいに打ちつけたもの)にその真綿を一枚ずつはりつけ、まわし(マワイ)に立てて、まわしながら引き出して、よりを糸車でかけて使用して居ました。

(二) 明治中葉頃から養蚕が行われるようになり、繭をなべで煮て、手で動かしてよりをかけ使用して居ました(その当時座繰り機械もなかったのだ)

六 あい染め

(一) あいの製造

あいの苗を木陰の肥よくな場所に植え付け、施肥をいたし、成熟した時に切り取り、石灰を溶かした液に数日浸して置く、あいは発酵してぶつぐ泡立つ。泡

立つた後は毎日のように棒か竿かでかきまぜる。全部が腐しよくした時にその汁をしぼり取り、沈でんさせてあいをつくる。

(二) あいの立て方と染め方

ガジマルの青枝や蚊やり木(ホウ木)等を蒸し焼きして造った木灰を用意して置く。あいをたるかおけに入れ、それに水と木灰を混ぜて溶かす。あいの良否と、あいの液の染力の強弱はその時の水の量・灰の量・あいの量の配分によって決まる。冬のあいは、なるべくかまどの近くの暖い場所を選んでたてる。数日にして薄あいの色の小粒の泡立ちが見えます。全面泡立つのを待って、手のひらに一滴たらしめます。美しいあいの水玉が染め付く時は、ちょうどよい染め時です。早速朝晩二回ずつ、静かにかせをもみほぐしながら染める。しぼったり浸したり幾回も繰り返して染めます。染め終った時は長いあいしやくしで、おけの中のあいを底から静かにかきまわします。染め始めの数日間の染め上りは、殊に色が華やかで美しいので、初あいとして賞讃して居ます。かすり染めなどは、必ず初あいで染めなければいかなと言われて居ます。

(三) あいの移入

沖縄県国頭郡(ヤンバル地方)は高温多湿であいの特産地でした。明治初年頃から同地方の商人が、組みウバの帆かけ舟にあいを満載してナビグムイに入港するようになりました。「旅は浜やどり」と言う言葉のとおり、帆で小屋を造り、そこに起き伏してあいを売りさばいて居ました。そのお陰で、島の婦人たちもあい作りの労作から解放されて、少しは楽になりました。しかし、自家製のあいの方が、染め上りが華やかで美しいと言う評もありました。

七 その他の染色

あいは紺又は空色にししか染まないで、染料のない時代には、黄色は福木の生枝を煮詰めて、その汁で染め、紅色(黒ずんだ紅色)は紬染めの原料になっているテーチギ(しゃりんばい)をせんじて染めて居ました。又あい染めの代りに「テーチギの汁(シャリンバイ)」と「泥」とを、交互に染めても黒色になりますけれども、太陽光線で変色したり、糸の質を弱める欠点を多分に持つて居ました。

八 紅縞衣裳(アージマイショウ)、黒縞衣裳(クルジ

マイショウ)

民謡に「おいちゆぬ子はいかかさ 縞衣裳七ぶくと…」とあります。昔、縞の着物は富豪の娘の象徴とされて居ました。「七ぶくと」は七枚の意ではありません。おそらく二〜三枚のことだと思えます。紅縞衣裳の紅は支那製のビンガラと言う染料で、沖縄経由でこの島にも入りました。現今まで残って居る紅縞衣裳を見ると、昔のチンヂミーヌを原料にしたものもありますから明治初期から流行したことがわかります。黒縞縞はその後の出来のようで、本土から木綿かせが入つて後のものと思われまます。有名な縞、マシヌカムシヤシと申すこみ入つた縞などは、紅縞の方には織り出してありません。

紅縞縞は明治時代の若い娘の晴れ着で、その頃の若い娘たちのあこがれの的であった。しかしその原料が高いことと、織り方に高度の技術を必要としたので、その値段が高くなり、富豪の娘でないとなることが出来なかつた。仕立ては琉球風であった。この衣裳にちなんだ歌を次に紹介します

花染みにふりて 若つまやかみて

うりがさみる時 わみが事思むり

と、妻が「夫が目覚めて自分のもとに帰ること」を待ち望んで歌った歌で、当時紅縞縞をつけた若い娘さんの晴れ着姿がどれくらい美しかったかを表現して居る。その頃は地機で織って居たので、農業のかたわら、家族のために衣類を織る時間の見出し方のむずかしさと、又能率よく織れなかったことを、次のような歌で表現して居ます。

布は長たてて めくさ虫かまち

積であるひぢち 物思しみて

又地機で布を織ることのむずかしさを

七尋の布も 一ひぢちどはじめ

手習ぼうがはじめ イロハはじめ

このように昔の主婦が、農作業から家庭生活のすべてをしながら、家族のための衣類製作に苦勞して居たことの伺える歌もあります。

織りあげた布は、そのままでは仕立てると布目がゆがみ、布のつやもないので、今のしんし針とアイロンとを兼ねたようなものがありました。それがきぬた(チンタ)であります。織り終った布をチンタの棒に巻き、

それを前の方にぐるぐまわしながら、二本の棒でたたいて布につやを出したり、布のくせをなおしたりしました。又洗濯したものもそれでたたいてしわを伸ばして居た時のことです。それにつけての歌を次にかかげます。

眠る目も眠らし 思いしみじみと

誰が為に 打ちゆる 夜半のチンタ

九 服装の変遷

その昔、長いこと琉球に從属して居た面影を残して、婦人の服装は明治の代になっても殆んど沖繩式でした。しかし男子の服装は明治以前から本土式でありました。女子はそで丈七く八寸の広そでにして、えりにはウワエリ代りに黒えりをつけて、えり下がとても短く、あげは帯をしめる下に内部に折りまげて縫っておきました。はれ着などにはそで口をつける代りに、裏地のそで口から見える部分を特に真黒く染め増して居ました。日露戦争後和泊小学校長沖元綱先生が卒先して女子の服装改善を唱え、作業服は筒そで、晴れ着はたもとに仕立てるよう奨励し、毎晩各部落を巡回して当時の安藤マツ先生にいち／＼その仕方を指導させま

した。そのお陰で現在の服装が維持できたのであります。婦人の髪型も同時に改善し、従来の永良部マゲからチングリ型に改めました。

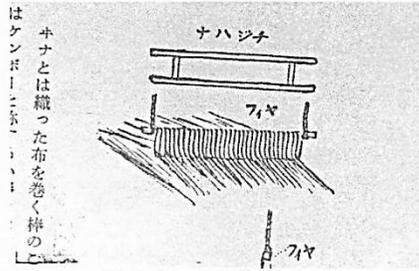
(注) ①紅縞縞(アージマイショウ)―現存はただ一枚で和泊町中央公民館に保管されている。

②沖 元綱先生―手々知名字出身、和泊尋常小学校長、和泊女子尋常高等小学校長、第七代和泊村長、鹿兒島県議會議員、手々知名字沖 治氏の伯父。

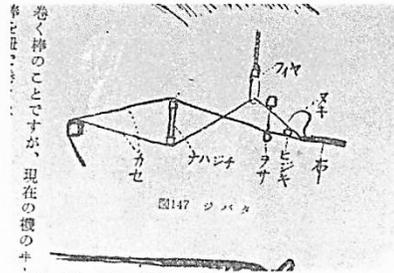
③安藤マツ先生―和泊字出身、奄美大島出身者で最初の鹿兒島県女子師範学校本科卒業生、和泊高等小学校訓導、安藤佳翠氏姉、医学博士操垣水氏夫人。

紡織の道具

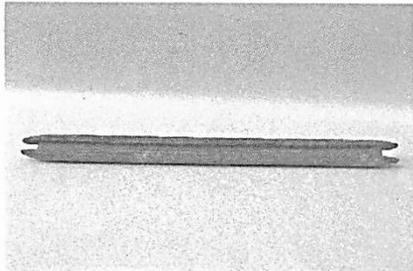
名称は大島語 () 内は和泊語



24. ナハジチ (ナージチ)



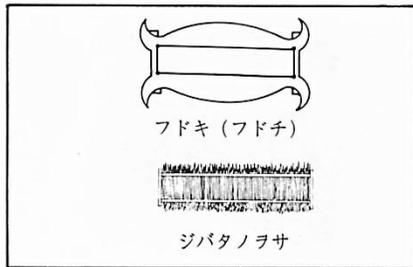
20. ジバタ (ジーバタ)



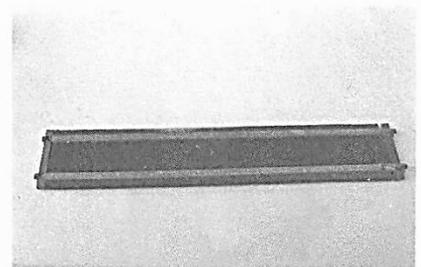
25. キナ (キニャー)



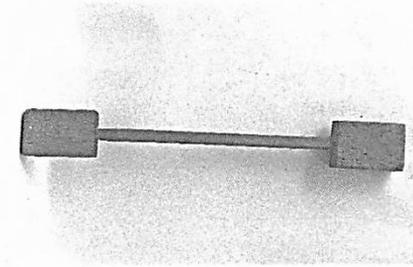
21. ジバタ (ジーバタ)



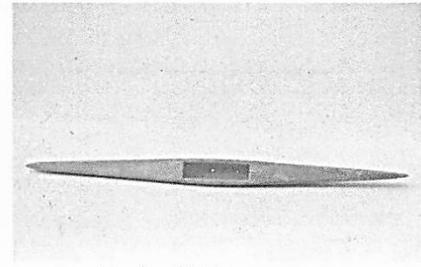
26. ウーサー (ヨウサー)



22. フドキ (フドウチ)



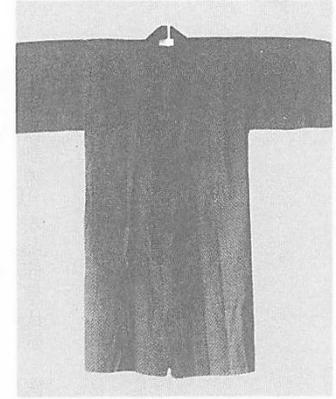
27. マキチャ



23. ヒジキ (ヒジチ)



16
クルジマスミチ (黒編緋)
明治中期から作り始めた

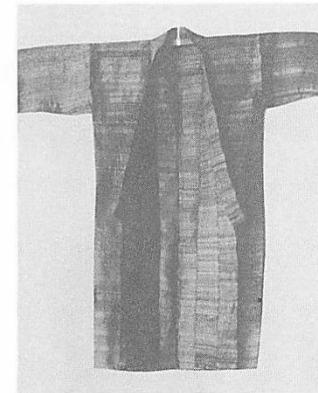


15
アージマスミチ
明治時代の娘の晴れ着で仕立ては沖縄式

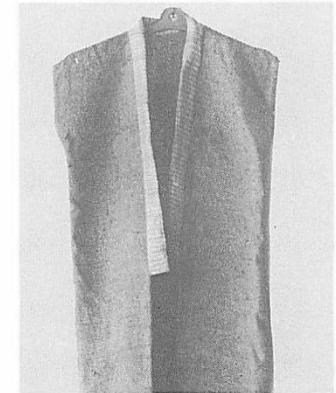


17
クヌチビシにビバ (九つ菱にとんぼ)
九つ菱ととんぼの胴体は、縦横の緋を合
わせたもの

衣服のいろいろ



19
バシャチャバラ
縦横とも芭蕉で織った縦縞の着物

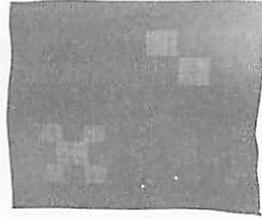


18
アンベラ (アンペラ)
作業用のうわっぱり

紺の模様(2) (注)ミイチイチチゲー3つの紺がたがいちがい。



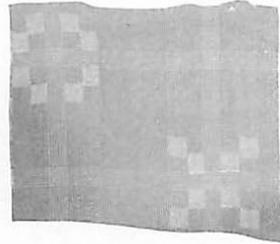
40. マシヌクムジャシ(紺の雲出し)手くびり紺で、明治30年ごろの青年の晴れ着に用いた。



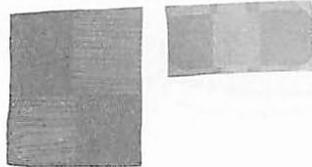
36. マキチャビシにイチチゲ
地機の縦糸を巻くマキチャに紺の形が似ている。



41. 布団用の模様
琉球紺を見本到手くびりで作った紺



37. カザモーシャにマキチャビシ
形が風車に似ている。



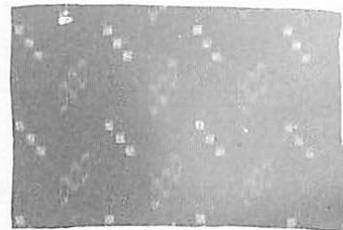
42. シチガラ(市松)
縦横とも精練した絹糸を使用してある



38. ターチビバにムーチビシ(とんぼ紺)
またはムーチイチチゲ



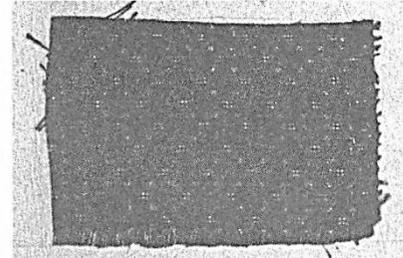
43. しめばたでしめて作った紺
昭和10年ごろ以後、本土の紺にヒントを得て
作ったもの



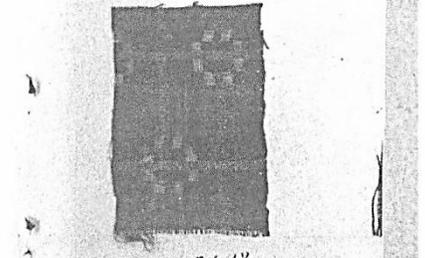
39. トウニスミチ(唐船紺)にミイチイチチゲ
横紺と縦横紺

紺の模様(1)

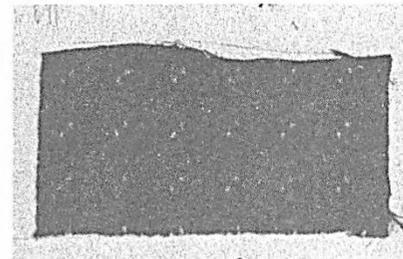
(注)イチチゲー2つの紺がふたつ、たがいちがいになっていることをいう。



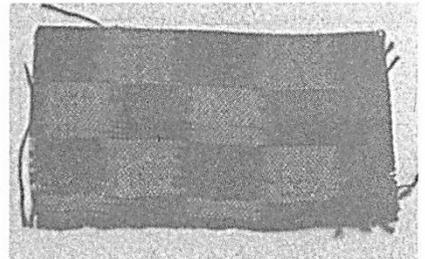
32. クムジャシ 明治の中期から作られた



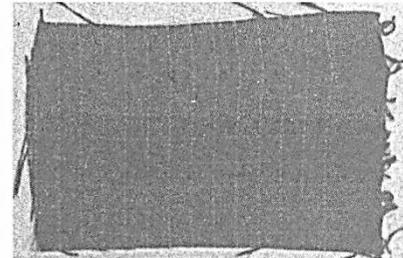
28. カザモーシャ(風車)しめたばによる紺



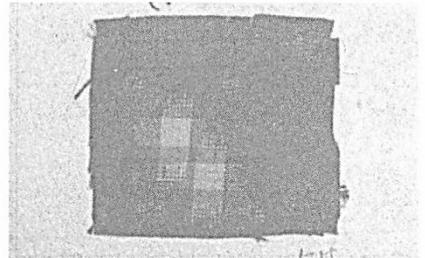
33. イチチゲにゴービシ
明治中期から作られた縦横紺



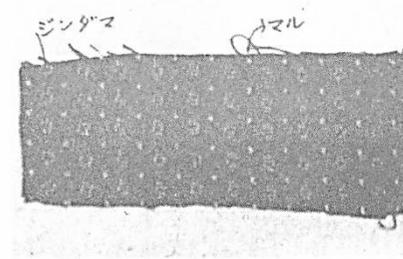
29. シチガラ(市松)しめたばによる紺



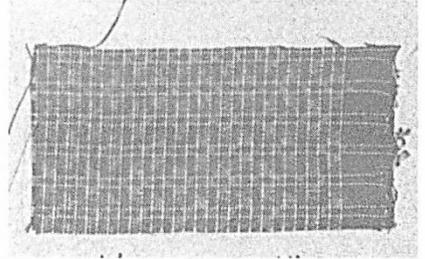
34. ゴバン縞にマル



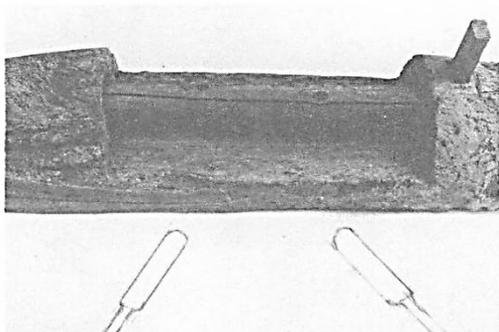
30. ゴービシにイチチゲ



35. ジンダマにマル

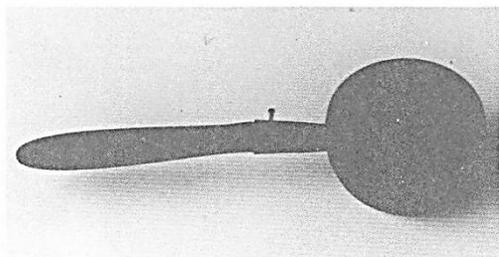


31. 六十玉またはカジモーシャ 紺は手くびり

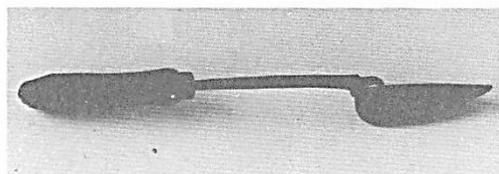


51. チンタ (粘)

織りあげた反布を中央の棒に巻き、下図の二本の小さいので、前の方に回しながらまんべんなくたく。目的は、しんし針とアイロンの役目を果たすことになる。

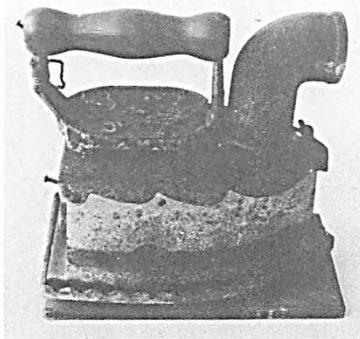


52. ひのし
木炭使用

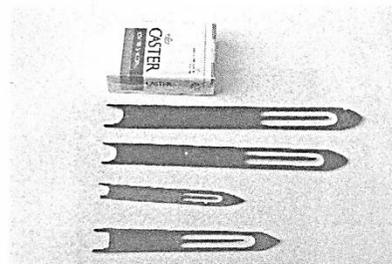


53. 焼きごて

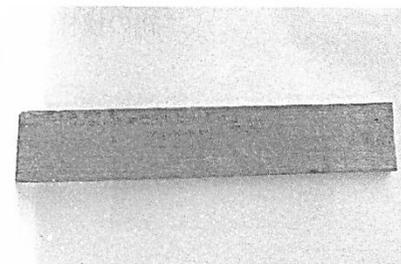
木炭を焼いた火鉢の中で焼いて、裁縫のときに使う。



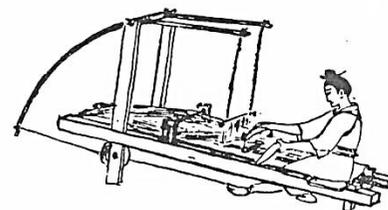
54. アイロン
木炭使用



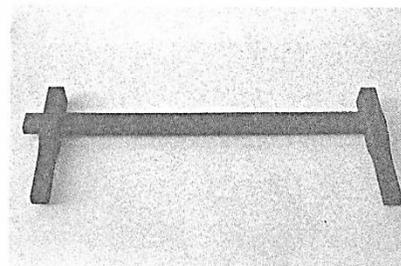
45. オサメドオーン
フッドチにハシイチュ (縦糸) を通すもの



44. シキチャ
地機を織るときにすわる板



47. ジバタ

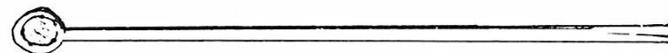


46. スミチハシケー (緋糸かけ)



48. フシチャー (腰当て)
地機を織るとき腰に当てるもの

49. ハプトウングシ (男物) (長さ20cm) 明治初年まで使用



50. マタサチトウングシ (女物) (長さ17cm) 明治から昭和初期まで使用

